

「手放す」 (マルコによる福音書 1 : 14-20)

弟子の召命は四福音書すべてに記されています。福音書ごとに内容が異なるのは、それぞれの福音書の記述が著者自身の主イエスとの出会いの真実の「証」に他ならないからです。なかでも、マルコによる福音書の記述は最もシンプルです。主イエスが自ら出かけていき、漁師を見つけ、招いた。その呼びかけに四人の男たちは応え、イエスに従った。これだけです。マルコによる福音書の著者にとっては、この記述のみで主イエスとの出会い、弟子の召命を伝えるのに十分だったのです。

主イエスの方からあなたを見つけ、近づき、語り掛け、招いて下さっている。主イエスに見つめられ語りかけられたなら、人はもうそれに抗うことなどできない。それほどに、主イエスの招く力、神の国へとわたしたちを導こうとする力は強いのだ！これが、マルコによる福音書の著者の主イエスとの出会いの真実だったのです。

今日の福音で「捨てた」と訳されている単語は「赦す」とか「手放す」という意味でも使われます。主イエスに招かれた男たちは、それまで何よりも大切にしていた網や家族を「手放した」のです。それらを物理的に手放したことが強調されてしまうと誤解に陥ります。そうではなくて、これがないと生きていけないと「ぎゅっと握りしめていた」ものを手放した、ということです。手に何かを握りしめたままでは、新しい何かをつかむことはできないからです。今、ここに救い主がおられる。福音がここにある。神の国がここに訪れている。それをいただくには、今ギョッと握りしめているものを手放して、主イエスによってもたらされる福音をこの手に、このからだに迎えなければならないのです。

けれども、それは人の力だけではなしえませんが、なにせ、手放すということは恐ろしいことだからです。ことに、今現在の明日をも見通すことができないわたしたちを取り巻く状況は、手放すことをより難しくしています。神よりも目に見える確かなものをどうしても求めてしまうからです。しかし、そのような今だからこそ、今日の福音はわたしたちにあらためて語りかけています。「主イエスの強力な招く力がわたしたちの手を開いてくださるから大丈夫だ！」と。